

伊豆の国市の観光に係わる課題とその解決方法の調査

静岡県立大学 国際関係学部 湖中ゼミ

指導教員：教授 湖中真哉

参加学生：天野崇 岩瀬珠美 丑澤安純美 大屋寛隆 勝又美妃 斎藤拓海 坂本美咲
平林花菜 堀江悟司 村上遙

1 要約

本研究では、指定課題「伊豆の国市の観光に係わる課題とその解決方法の調査」について、フィールドワーク（野外調査）に基づいた観光マップ・リーフレット作成によって解決することを試行した。

現地での予備調査を通じて、伊豆の国市の観光に係わる課題として、垂山反射炉の世界文化遺産登録に伴って観光客が急増することにより生じる渋滞緩和などの課題と、垂山反射炉のみに観光客が集中する「通過型」の観光地となってしまう課題の2つの課題を発見することができた。そして、その検討の結果、渋滞緩和のためのドライブマップと、市内散策のための観光ガイドリーフレットを作成することが、解決策として有効であるとの結論に至った。

そして、三日間の本調査を通じ、ドライブ経路の確認作業や伊豆の国市の観光資源を再発見する作業を実施し、調査成果を集約してドライブマップと観光ガイドリーフレットを作成した。

完成したマップ・リーフレットは、PDFの電子ファイルとして、伊豆の国市観光協会のホームページに掲載される予定である。

2 研究の目的

本研究は、指定課題「伊豆の国市の観光に係わる課題とその解決方法の調査」に基づき、市内垂山地区の垂山反射炉が今年度新たに世界文化遺産登録された伊豆の国市において、観光分野の現状と今後の課題を調査するとともに、それらの解決方法を検討・実施することを目的とする。

3 研究の内容

現地の行政機関や市民への聞き取り調査をもとに、伊豆の国市の観光に係わる課題について、本研究では特に以下の二点の問題を発見した。

- I. 垂山反射炉の世界遺産登録に伴う観光客の急増で、市内交通状況が悪化する可能性がある点

伊豆中央道（伊豆縦貫道）から垂山反射炉へのアクセスは大別すると、県道134号お

より県道 136 号を利用する伊豆の国市推奨ルートと、国道 136 号（通称下田街道）と県道 132 号を利用する非推奨ルートの二つがある。

非推奨ルートの通る下田街道は、多くの商業施設が存在する市民生活に直結する主要国道であり、世界遺産登録以前から渋滞が頻発している。急増した観光客の車両が流入すると、交通状況が著しく悪化し、地域住民の生活にも悪影響を及ぼす可能性がある。

市は先に述べた下田街道を介さない推奨ルートを設定し、ホームページ上で混雑緩和への協力を求めているが、推奨ルートの利点を観光客に十分にアピールできていないことが調査により判った。

II. 薩山反射炉が「通過型の観光地」になりやすい点

薩山反射炉への来客数は、世界遺産登録を機に大きく上昇しているが、反射炉自体での滞在時間が短いこと、伊豆中央道（伊豆縦貫道）からのアクセスが良く首都圏から日帰りで訪れることが可能であること、近隣自治体にも豊富な観光資源があることなどから、反射炉および伊豆の国市は旅程の目的地ではなく経由地として位置づけられやすい「通過型の観光地」の傾向があると考えられる。聞き取り調査においても、日帰り客が多く、他の観光施設や宿泊者数も増加が見られないことがわかった。

今後もしばらくは薩山反射炉に集客力が見込めるため、反射炉への観光客の市内滞在時間を伸ばし、周遊や宿泊を促すための方策が求められていることが判明した。

また、上記の課題について、本研究ではそれぞれ以下のような解決策を実施した。

i. 推奨ルートのドライブマップの作成。

伊豆の国市推奨ルート沿線の景勝地や観光スポットを紹介するドライブマップを作成した。混雑が少なく景色のいい道であるという利点を示すことで、推奨ルートの認知度向上と誘引効果を狙った。

ii. 伊豆の国市散策ガイドの作成。

市内の周遊を促すための観光ガイドリーフレットを作成した。調査により伊豆の国市を訪れる観光客は高齢者が多いことが判明したため、新規の観光客を開拓するためには、若い女性層を対象とした観光促進が重要であるとの結論に至った。同時に、若い女性層に限定することで既存のマップやリーフレットとの差別化を図った。若い女性層はスマートフォンをおもに利用することを想定したリーフレット作成を目指した。内容はグルメ・スイーツを特集したものと、写真撮影に適したスポットを紹介するものの二種類である。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

反射炉周辺のみの案内を作成することを計画していた。ドライブマップと、ビジュアルイメージに重点を置いたガイドの二種類を作成し、デジタルマップツールを利用し、スマ

一トフォンからの閲覧を前提としたつくりを想定していた。

(2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止）とその理由

現地調査を踏まえて、ガイド・マップは目的別にドライブマップ、グルメ・スイーツガイド、写真撮影スポットガイドの三点を作成するよう変更し、散策マップはより人を呼びたい長岡地区を中心としたものに変更した（B）。デジタルマップの活用は、技術的に難易度が高く実現できなかつたため断念し、スマートフォンを使って詳細を検索しやすいよう、QRバーコードやキーワードなどを盛り込むことで代替した（B）。

(3) 実績・成果

成果として以下の三種類の観光ガイド・マップを作成することができた。

1) ドライブマップ

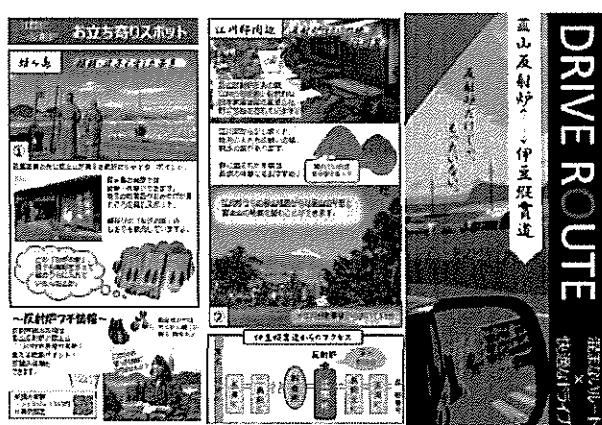


図1 ドライブマップ裏面（報告書提出時版）

下田街道の渋滞を回避するため、市の推奨ルートをよりわかりやすい形で表記したマップを作成した（図1）。上から目線で混雑緩和への協力を指導する内容とはせず、ルート沿線の景勝地の写真、観光スポット、富士山ビュースポットを掲載し、利点をアピールすることで自発的な推奨ルートへの誘引効果を狙っている。

裏面では観光スポットの詳細を紹介しているが、同様の観光案内と重複しないような着眼点を心がけた。

2) グルメ・スイーツガイド

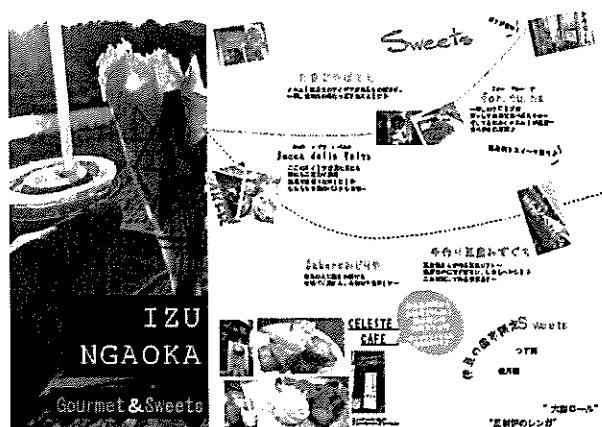


図2 スイーツガイド（報告書提出時版）

学生の目線から、20代女性向けの魅力ある店舗を掲載した（図2）。徒歩ないしは自転車での周遊を前提としている。旅行先でもスマートフォンを用い、詳しい地図や詳細情報を調べながら移動する若者の傾向に着目し、詳細な地図情報は省き、代わりにQRバーコードや電話番号など、その場でのインターネット検索に役立つ情報を盛り込んだ。

3) 撮影スポットガイド

若者を中心利用者の多い画像共有サービス“Instagram”との連動を意識した（同サービスがきっかけで観光客が急増した例が存在する）。詳細説明を抑え大まかなビジュアルイメージを伝えることを重視している。利用者が自分で写真を撮影しインターネットにアップロードすることを促すことで、観光客の手を借りイメージ発信の増加・継続に繋がることが期待される。

グルメガイドと同様、地図は簡素なものとし、インターネット検索の助けとなる情報を盛り込んだ。比較的広範に及ぶため、レンタサイクルの貸し出し場所情報も掲載した。

(4)今後の改善点や対策

今回作成したマップ・ガイドには以下のような課題も存在する。

ドライブマップは、走行距離が多少増加するルートを掲載しているため、観光客の多くが使うカーナビとは異なるものになる可能性もある。また、個人向けであるため観光バスへの訴求が期待できない。修善寺方面から来る／帰るドライバーにとって複雑なものとなるなどの課題が考えられる。

グルメ・スイーツガイドは、車での観光を想定していないため、駐車場のない店舗も多数掲載されている。また宿泊に結びつける情報は載せていないため、長岡の宿泊者増加には直接的に寄与できるものではない。効果的な設置場所の選定も必要となる。

5 地域への提言

推奨ルートを案内する看板や表示が少なく、はじめて来る観光客にとってはわかりにくいため、何らかの対策が必要となる。ただし、案内看板や注意喚起の看板が過剰に増え、景観が悪化してしまった世界遺産の例があることも考慮しなければならない。

また、本研究では手が届かなかったが、外国人観光客への対応も重要となっていくと思われる。今回の調査では、中国人観光客が多く訪れていることが確認されたが、世界遺産登録や東京オリンピックによって、将来的には他の地域からの観光客も増加する可能性がある。現状では、主要な観光スポットでも外国人向けの（英語などの）案内の不足が見受けられる。今後は多様な言語や文化的背景を持つ外国人観光客を、地域がどのように受け入れていくのかも大きな課題となることが予想される。

6 地域からの評価

本研究の評価は、リーフレット公開後の反応や反響を待たなければならぬため、現時点では十分に行うことはできない。しかし、これまでのところでは、伊豆の国市の住民の方々から好意的な評価をいただいている。また、SBSテレビの番組12月17日に本研究の活動内容が紹介され、今後も再度の取材が予定されるなど社会的関心を呼んだ。

地域資源の発掘と資源を生かしたまちづくり

—川根本町の資源を若者に親しんでもらう為の提案—

静岡文化芸術大学 生産造形学科 黒田ゼミ

指導教員：黒田宏治

参加学生：北村理恵、菅原実歩

1. 研究の出発点

若者に川根本町の観光資源、お茶や温泉や自然等に触れてもらうだけではなく、お茶農家さんをはじめとする川根本町の皆さんの人柄の良さからも川根本町に興味を持ってもらい、川根本町への「親しみ」を持ってもらうことを最終目的とする。年々人口が減少しつつあり高齢化が進んでいる川根本町に、何度も訪れてくれるような「交流人口」の増加を促す。若者の来訪が増えることにより、まちへの活気に繋げたい。そのような目的に沿って、2つのテーマを定め課題に取り組んだ。

川根本町の特産品であるお茶をもっと若者（ペットボトル茶などは普段から購入しており、お茶には親しみがあるがリーフ茶に親しみがない若者）に親しんでもらうための方法を考える。現状の川根本町のお茶売り場（茶茗館横の緑の玉手箱）で販売されているお茶は、似通ったパッケージデザインが多く、説明も少ないため、お茶初心者にとって、どれを選べばいいのか分からず親しみにかけると感じられる。農家さんが美味しいお茶を作っていても、まず手に取ってもらえなければ意味がない。そのため、どのような人がそのお茶をどんな想いで作っているのかを知ることが出来れば、感情移入することができ親しみを持てると考え、研究を開始した。【取組A】

また、川根本町は健康寿命が全国、県内で上位の健康なまちである。その要因を調べたところ、川根本町の特産物である“お茶”が深く関係していることにたどり着いた。そこで、お茶を切り口に川根本町の健康要因を探った。そして川根本町のSL、お茶、大自然、温泉などの観光資源に加え“健康なまち”としての側面を活かし、新しい観光客層（特に若者）増加を図りたいと考えた。川根本町の様々な観光資源を新しい形で提供することにより、新たな観光客層（主に若者）を増やすために研究を開始した。【取組B】

2. 若者向けのお茶のプロモーション【取組A】

(1) インタビュー調査と現状分析

- 7名のお茶農家さんと、1名の茶箱加工者へのインタビュー
(10月26日、11月11日実施)

<インタビュー内容と実施事項>

- ・お茶作りのこだわり（無農薬、焙煎方法等）を挙げて頂く。
- ・農園の歴史、お茶作りへの想い等を教えて頂く。
- ・お茶農家さん、淹れて下さったお茶、商品の撮影。
- インタビューや文献から考察された現状、課題
 - ・現時点でのお茶のパッケージデザインが似通っている。



川根本町の茶畠風景

- 思わず手に取りたくなるようなパッケージが少ない。パッケージと中身の関連性がないものが多い。外見は中身に伴うものである。味で勝負する前に、目に止まらなければ買ってもらえない。
- ・お茶農家さんでも、これが一番使い易いという急須に出会えていない。全ての茶葉に対応できるような急須は存在しない。また、若者が急須を持たない理由の一つに、自分の部屋に置きたいような急須が売っていないこともあるのではないか。
 - ・食堂などにてセルフサービスでお茶を飲むことができる、飲食店に立ち入るとお茶が出てくることから、「お茶は無料で飲めるもの」という考えを持つ人が多いため、お茶が「嗜好品」だという考え方を持っておらず、お茶にお金を割かない。
- お茶にも役割が様々存在し、食事と一緒にとる「生活必需品」としてのお茶、お客様に振舞うような、場の雰囲気を和ませるすこし高めの「嗜好品」としてのお茶、飲んでいるだけでステータスというような「ファッショニ」としてのお茶がある。
- ・上級煎茶の、湯冷ましの手間が面倒に感じる人がいること。本当に気に入ったお茶を飲む為ならば、その手間も苦にならないのではないか。
 - ・お茶のひとパック量が、初心者にとっては多く感じる。いろんなお茶を楽しみたくとも、一つ一つが多いため、たくさん買うことができなくなる。リーフ茶初心者向けに少量パックを販売しても良いのではないか。

(2) お茶に親しむステップとデザイン提案

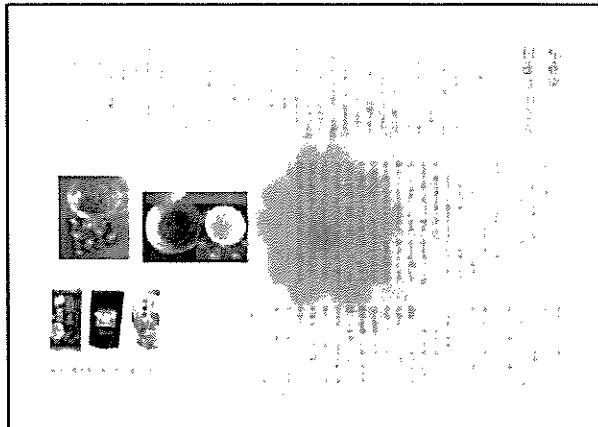
- 以上の結果を踏まえて、若者へお茶に親しんでもらうためのステップを次のように考える。

- ① お茶の味、お茶農家さんの人柄を知ることでお茶に興味を持つてもらう。
- ↓
- ② ティーパックのお茶を買ってもらう。
- ↓
- ③ リーフ茶と急須を買ってもらう。
- ↓
- ④ 自分の気分や状況に合わせ煎茶、ほうじ茶、烏龍茶など様々な種類のお茶を飲む。
- ↓
- ⑤ いろんな農家さんのお茶を飲み比べて楽しむ。

- まずは最初の「お茶に興味を持つてもらう」という点を満たすために、
 - ・導入として、お茶農家さんの情報やお茶についての知っておくべき情報（いいお茶ほどぬるめのお湯を淹れること、お茶を淹れる手段は急須だけではないこと等）をまとめ小冊子を作成。
 - ・お茶農家さんの情報をまとめた紙をパッケージにして、お茶 1 煎分のティーパックを制作。表紙はお茶農家さんの似顔絵。（※そのイラストは、開国後日本の輸出産業を支えたお茶を輸出する際にお茶保存に使用していた茶箱に貼られていたラベル「蘭字」をイメージしたもの。それを、茶箱型収納ケースに入れた商品を企画する。）



蘭字をイメージしたお茶農家さんの似顔絵



お茶農家さんの情報を載せた冊子

3. 川根本町の健康ツアープラン【取組B】

(1) 現状調査と地域調査

○ 3人のお茶農家さんにインタビュー（11月11日実施）

（内容）お茶と健康に関するお茶農家さんの考え方、川根本町の生活環境等についての質問

- ・お茶農家さん自身の生活（食事内容、運動、お茶を飲む回数など）について
→お茶農家さんは四六時中お茶を飲んでいる（商品の味見としても避けられない）
- ・川根本町の町民が健康であることにお茶は深く関わっているが、要因はお茶だけではない
→傾斜が多い（足腰が鍛えられる）、空気がきれいなど
- ・川根本町の町民は健康のためにお茶を飲んでいるわけではない
→特産物であるお茶は、幼い頃から日常にあるのが当たり前だった
- ・健康寿命の長い地域は大自然のところが多い
- ・健康寿命の長い地域は他の地域に比べ、一次産業が盛んなところが多い

○ 他の県の健康な地域を調べ、健康に繋がる他の要因を探った

健康寿命県内トップの地域（平成22～25年調べ）

- 馬路村（男 92.8 女 92.2）、大分県九重町（男 78.84 女 83.46）、宮崎県西米良村（男 84.28 女 88.22）
- 埼玉県鳩山町（男 82.76 女 85.63）、群馬県吉岡町（男 82.83 女 86.77）、
- 東京都あきる野市（男 82.11 女 84.25）、広島県安芸太田町（男 81.25 女 83.81）
- 奈良県上北山村（男 84.4 女 90.04）、和歌山县古座川町（男 77.84 女 83.89）

○ これらの町の特色

- 総面積の9割以上を森林が占める／他の地域に比べ一次産業が盛ん
若者の都市への流出により、高齢化問題を抱えている／特産品（農産物）が多数ある

○ まちの資源を活かした取り組み、事例（健康に関連しそうなイベント）

- ・北山村「心の道ウォーク」：地元ガイドの説明とともに自然の中を歩くツアー

- ・鳩山町「石坂の森」：多くの人々が里山と関わる環境を整備
- ・高知県「架空の旅行会社設立」：ネット上に架空の旅行会社を設立

(2) 川根本町の観光資源を活かした健康ツアープランを提案。

①結婚が決まった女性のツアー

(対象) 結婚を控え、結婚への不安(マリッジブルー)を抱えている女性

(目的) 結婚を控えている女性が集まり、花嫁修業、情報交換などを行う

(内容例) ・お茶の淹れ方を学ぶ→花嫁修業の一環として

・美女作りの湯に入る→美容促進効果

・お弁当づくり→花嫁修業の一環として

・作ったお弁当を桜の木の下で食べる

・お茶摘み→お土産として

(期待される効果) 精神面の健康づくり→マリッジブルー回避、結婚に関する情報交換

②大学生のサバイバルツアー

(対象) 冒険・探検に好奇心旺盛な大学生（個人参加可）

(目的) 大自然の中で謎を解きながら楽しく健康促進

(内容例) ・チーム分けをし、サバイバルを行う

・山林の中に隠された暗号を解読し、

食材カードを獲得 (BBQ<昼食>)

→山林、吊り橋を歩き回る運動

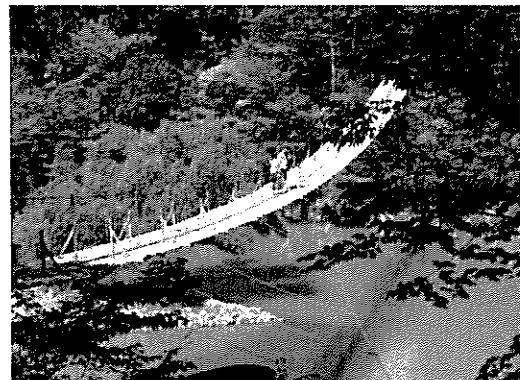
・キャンプファイヤーでチーム毎の出し物

→知らない大学生との交流

・チームごとで卓球、勝ちチームのみ

温泉に入れる→サバイバル感（わくわく）

(期待される効果) 運動による健康効果、自然・交流による精神面の健康効果



寸又峡 夢の吊り橋

- これらを、宣伝効果のある SNS (LINE/Twitter/Facebook etc) などで宣伝することにより、話題性を広げる。

4. 今後の課題

本学と川根本町との毎年の交流（2011年より開始）の中で、川根本町の観光等においての課題発見・分析を行い、川根本町における地域資源の発掘と資源を活かしたまちづくりに向けての提案が挙げられていたが、その提案の実現に向けての取り組みを、川根本町役場と力を合わせながら精力的に行っていきたい。

西伊豆・漁村コミュニティにおける地域づくりに関する研究

常葉大学 社会環境学部 山本ゼミ（研究室）

指導教員：准教授 山本早苗

参加学生：青木日向子、岩邊代記、加藤磨雄、
小泉葵、近藤伸子、近藤有紀也、
佐藤友香、太村朱里、巴博紀、
福興隆寧、八巻良介、山本竜平

1. 要約

本研究は、西伊豆・松崎町岩地地区を調査対象地として、過疎地域の存続における諸課題と対策を明らかにすることを目的とする。具体的には、聞き書き調査を通じて、漁村コミュニティにおける生業と生活の変化を明らかにし、地域が直面している課題を整理する。また、地域の課題解決に向けて、地域個性を生かした住民参加型イベントを企画・運営する過程を通じて、地域住民と大学が協働した地域活性化の方策を検討する。

2. 研究の目的

伊豆半島南西部に位置する松崎町は、静岡県内でもっとも人口が少ない市町村の 1 つであり、過疎・高齢化が急速に進み、持続可能な地域づくりが喫緊の課題となっている。本研究は、西伊豆・松崎町の漁村コミュニティを事例に、過疎地域の存続における諸課題と対策を明らかにすることを目的とする。

常葉大学は、2003 年から現在まで、松崎町石部地区にて棚田保全ボランティア活動に取り組み、2012 年以降、地域住民と学生が協働して、地場産品を販売するマルシェやカフェの企画・運営などの地域づくりを継続的に実践してきた。

3. 研究の内容

(1) 調査方法と内容

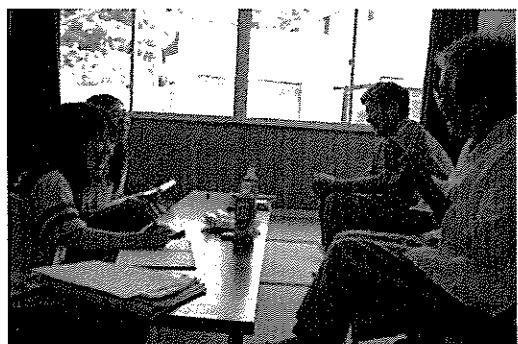
2015 年 7 月から 11 月にかけて、松崎町岩地地区にて、予備調査（7 月 3～5 日）、本調査（8 月 25～27 日）、補足調査（11 月 28～29 日）を実施した。本研究を実施するにあたり、松崎町、岩地地区自治会、岩地老人会「天寿会」および石部地区自治会、石部こらっしゃい会、石部棚田保全推進委員会の協力を得た。

予備調査では、地元学の手法を用いて、地域をくまなく歩いて写真撮影を行い、地域資源マップを作成し、調査項目を整理した。本調査では、おもに 60～80 代を対象に、漁師、農家、民宿経営者、観光協会長、神主など地域住民 12 人に対する聞き書き調査を実施して、地域の古写真や関連資料を収集した。本調査で不明だった点や聞き取りが不足していた点については、補足調査を行った。

聞き書きとは、特定のトピックに焦点を当てるのではなく、語り手の人生について、1人あたり約2時間程度じっくりと話を聞き、録音した語りを一字一句すべて書き起こして、編集したものである。語り手全員に編集原稿を送付して内容を確認してもらった後、さらに推敲を重ねて報告書を作成して、集落に全戸配布する。



岩地公民館で予備調査の顔合わせ



聞き書き調査の様子

(2) 学生によるイベントの企画・運営

山本ゼミおよび学生有志が中心となり、松崎町での聞き書き調査の成果を生かして、地域住民と協働したイベントを企画・運営してきた。ほぼ毎月1回、地場産品や加工品を販売する「青空マルシェ」と郷土料理や地元食材を生かした料理を提供するカフェ「いっぷく亭」を開催した（2015年5月16～17日、7月5日、8月9日、10月3～4日、11月29日、12月13日）。毎回、約20名の学生がスタッフとして参加した。

マルシェでは、地域住民が、自分たちで商品価格を設定し、旬の野菜や果物および加工品を出品する。学生は、商品の.Popup作成や店舗の設営を担当し、販売スタッフを務める。

商品の売上金の90%が出品者に還元され、残り10%が、地域活性化を目的とした地域住民有志の会「石部こらっしゃい会」に手数料として入る仕組みとなっており、地域活性化のための活動資金となる。カフェについては、地域の女性たちの協力を得ながら、地元食材の手配から調理、販売に至るまで、すべて学生が主体となって行っている。カフェの売上金は、学生たちの活動資金源になる。



棚田でのイベント



マルシェとカフェ



地域住民と学生による餅づくり

4. 研究の成果

(1) 当初の計画と実際の内容

本研究は、ほぼ当初の予定通り実施することができた。聞き書き調査では、学生との対話を通じて、語り手となった地域住民自らが、地域の歴史や生活文化を見直し、自分の人生を捉え直していった。本調査を通じて、以下のことがわかった。

岩地地区は、カツオ漁やマグロ漁を主とした遠洋漁業を生業としてきた地域である。遠洋漁業で男性が不在の村を守るために、女性たちは、女子消防団や女子青年会を立ち上げ、消防技術を学び、祭礼を運営した。さらに、託児所や娯楽の場を生み出すなど地域ニーズに対応することにより、女性たちが地域自治の基盤を支えてきた歴史が明らかになった。

オイルショックや水産業の衰退に伴って、漁業から観光業へと生計の中心が移行し、女性たちが民宿経営者となり、男性たちは漁船からタンカー船に乗り換えていった。岩地地区では、今なお、遠洋漁業時代の船ごとのまとまりが強く、祭礼や年中行事、さらには日常的な社会関係の中においても、船仲間の関係が生かされていることがわかった。

松崎町では、過疎・高齢化が進み、少子化、流出人口の増加、独居老人問題、移動手段と買い物問題、空き家問題、耕作放棄地の増加と獣害、観光業の低迷、若者の仕事場づくり、伝統行事の継承、津波対策など多くの課題が山積している。

しかし、これらの課題に対応する際にも、船仲間や神楽保存会、女性会、観光協会が機能し、コミュニティの紐帶が維持されていた。また、これまで近隣集落での聞き書き調査を行ってきたが、浦ごとにまったく異なる生活文化が形成されていることも理解できた。

(2) 実績・成果と課題

本年度の実績と成果としては、まず、聞き書き調査の内容をまとめた報告書（聞き書き第4集）を作成した。調査地に全戸配布するほか、松崎町、振興公社、観光協会、農林事務所、NGO/NPOおよび国交省半島振興室など関係機関に配布して、地域活性化のためのアイデア集として活用してもらう予定である。また、2016年3月12日に、廃校になった松崎町・旧三浦小学校にて成果報告会を開催し、聞き書き調査や地域づくり活動の成果について発表する予定である。

次に、地域づくりの企画・運営を実践する過程を通じて、学生たちは、「部落の子ども」と呼ばれるほど地域に溶け込み、地域住民との間に強い信頼関係を築いていった。学生は、地域のしがらみとは無関係に、多様な人びとが集う場を形成して、持続可能な地域づくりを支える中間支援組織の役割を担いつつある。

最後に、松崎町の強い要望を受けて、2015年10月13日に、常葉大学は、はじめて包括連携協定を締結し、地域連携事業の制度化を行った。これまで社会環境学部が、松崎町での地域連携事業に取り組んできたが、今後は、本学10学部19学科の多様な専門分野による地域連携事業を実施していく予定である。さらに、本年、山本ゼミと学生有志による研究活動成果が評価され、公益財団法人 静岡新聞・静岡放送文化福祉事業団「第5回ふ

るさと貢献賞」を受賞した。

本研究の課題としては、まず、イベントの企画や準備に多くの時間が割かれてしまい、調査研究の成果を地域づくりに直接反映したプロジェクトを新たに展開することができず、これまでの活動内容を十分に深められなかつた点である。

また、本研究では、聞き書きという手法を用いることにより、おもに文字や写真として地域の生活文化を記録することに重点を置いていた。しかし、松崎町の職人文化を記録・保存するためには、文字や写真では表現できないそれぞれの職業独特の手順や動作、リズムなどを映像資料として残すとともに、調査過程そのものに、ローカルな技を継承するしくみを埋め込み、人材育成を可能にすることも必要である。

最後に、現在、学生の活動拠点として、空き家になっていた松崎町の古民家を活用しているが、地域住民や都市住民の交流の場となるような工夫や定期的にワークショップを開催するなど、古民家の活用方法を検討する必要がある。松崎町内には廃校や廃施設が多数あるため、これらの遊休施設を有効に活用するために、本学の多様な専門性を生かした地域連携事業の体制や実施計画について検討を進めていく必要がある。

5. 地域への提言

調査やイベントを通じて、以下 2 点を提案する。廃校となった旧三浦小学校をフィールドミュージアムとして活用して、聞き書き調査等の研究成果をアーカイブ化し、海・山・里の体験プログラムを生かした着地型観光に取り組み、都市・農村交流を促進する。

地場産マルシェやカフェの常時開催を要望する声が地域内外から寄せられたので、地域の思い入れのある場所を生かした交流拠点を形成する。手しごと工房など新たな仕事場を形成することで、高齢者世帯の健康づくりや生きがいづくりにつながると期待される。

6. 地域からの評価

行政や地域住民から、もっとも高く評価されたのは、聞き書き集の作成である。聞き書きに語り手として参加し、また読み手となることで、地域の良さに改めて気づき、自分たちの誇りを取り戻すことができたという評価を受けた。イベントで、郷土料理を振舞ったところ、40～50代の地元の女性たちが地域の食文化に関心を持つようになったという感想が多く寄せられた。イベントの場が、地域で途切れていた世代間継承の場になっている。

行政からは、三浦地区の漁村コミュニティに限定せず、松崎町の中に広く残されている技術や生活文化も記録・保存してほしいという要望を受けた。たとえば、なまこ壁をはじめとして入江長八による独特の左官技術、石積みや炭焼きなどの職人の技、松崎町が全国シェアの 70% を占めている桜葉の栽培技術などである。

地域住民と学生が協働して企画・運営しているイベントについては、とりわけ 70 代以上の女性たちから、「日々の生活に張り合いができた」「生きがいがみつかった」という声が多数寄せられた。

浜松市引佐の住民や小中学生との協働による野生生物の保全

—農村ビオトープによるタガメなどの水生生物の保護増殖—

常葉大学社会環境学部 山田辰美ゼミ

代表 4年 天野鈴

I. はじめに

過疎化と少子化の進む浜松市引佐地区では、住民が地域起こしの道を模索し、新東名高速道路のジャンクション建設等の開発の中で、失われる自然や文化を守ろうとする気運が生じていた。小学校3校と中学校が合併し、県内初の小中一貫校がスタートし、交流のあった皆さんのが地域活性化を目標に掲げたNPO法人「ひづるしい鎮玉」を立ち上げた。山田ゼミでは以前からホタルの保全活動で現地に赴き、地元の方々や子ども達と交流し、河川の環境改善などに取り組んで来た。「タガメの里づくり」を目指す今回のプロジェクトは、地元の多くの住人や子どもたちの熱心な地域起こしの取り組みを支援するものである。

県内で絶滅の懸念されていたタガメやクロゲンゴロウなどの生息が、本学の研究所の調査で久々に確認された。平成24年に開催された地域の自然に関する学習会で、タガメなどの止水性の水生昆虫はホタルとともに保全すべき魅力があり発信性の高いことについて関心が集まった。講演した山田教授はNPOの求めに応じて、平成25年に「タガメの里」計画の中核施設としてビオトープ造成の提案をした。平成26年3月に地元の方から引佐地区別所にある休耕田2枚を提供していただき、NPO法人の方と希少水生昆虫の増殖拠点となるビオトープ作りに着手した。

今年度は造成から2年目であり、ビオトープの環境整備をさらに進めるだけでなく、地域全体を視野に置いた展開を検討した。また、以前、実施していたホタルの観察会や保全活動で熱心に参加してくれた引佐北部小中学校の生徒に対する環境学習も、昨年度からNPOと協働して取り組んでいる。未来を担う子どもに、ビオトープでの泥まみれの活動を通して、地域の自然の豊かさに気づいてもらうことから始めている。

II. 目的と活動計画

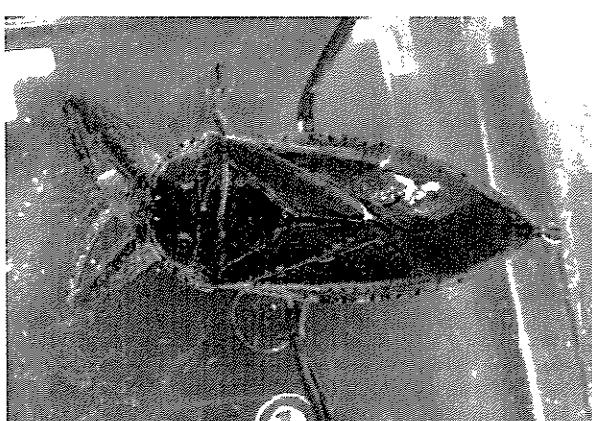
浜松市引佐地域においてタガメをシンボルとする水生昆虫を保護・保全することで、より自然豊かな地域とすることを目的としている。目的達成のために今年度の活動計画を以下のように設定した。

1. 水生昆虫のビオトープ造成

造成から2年目を迎えたビオトープの環境を修正・改善する作業を行う。生き物調査を行い、生物多様性や景観を評価する。現状の評価をもとに今後の整備方針を検討する。

2. 小中学生に対する環境教育

引佐北部小中学校の生徒に対する環境教育も、NPOと協働して取り組む。未来を担う子



どもに、地域の自然の豊かさに気づき、どんなふるさとを守り育てようとするのかについて考えてもらう機会を作る。

3. 生息環境調査と保全活動

① 引佐地区の水生昆虫相調査

静岡県内で最も多くの種を記録している引佐地域の広範囲において、水生昆虫の採集調査を行う。「タガメの里」の可能性や実態を把握する。

② 溜池におけるタガメ保全

タガメの生息を唯一確認できた池に迫る絶滅の危機を、保護柵の設置等の対策で改善する。

③ 久留女木棚田のエコアップの提案

静岡県の棚田等十選で指定された久留女木棚田は環境改善によって水生昆虫類の優れた生息環境になりうるポテンシャルを有している。現地調査に基づいて、どんな環境改善が可能か検討する。

4. タガメの域外保全

現地保全の困難性を克服するために、大学の実験室において、タガメの人工採卵と飼育増殖の方法を試した。域外で増殖させた個体のビオトープへの導入によって絶滅の危機を緩和するためである

III. 活動内容と成果

1. 水生昆虫のビオトープ造成

(1)休耕田を利用したビオトープの造成

地元の方から引佐地区別所にある休耕田 2 枚を提供していただき、平成 26 年 3 月に NPO の皆さんと共に造成を開始した。造成地は、浜松市引佐地区別所にある水はけの良い休耕田（約 1276 m²）で、近くには川があり、効率的に水を得ることができる。NPO の方々には主に重機による作業をお願いした。

(2)ビオトープ内の生物調査

① 水生生物

26 年度は、6 月・7 月・9 月に生物調査を行った。その結果 8 科 11 種の水生昆虫類が確認され、水生昆虫類のエサとなるカエル類は 1 科 3 種の定着が確認された。（表 1）

今年度の 10 月・11 月の調査では、6 科 7 種という結果だったが、今年は新たにタイコウチが捕獲されタガメ類は 4 科 5 種、ゲンゴロウ類は 1 科 2 種であった。多くの生き物が比較



図 1. ビオトープ造成予定地（平成 25 年 3 月）



図 2. 取水口の造成様子（平成 25 年 3 月）

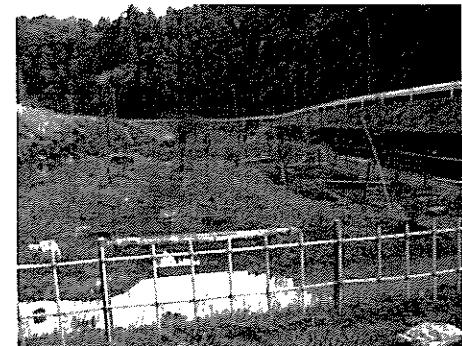


図 3. 完成したビオトープ（平成 26 年 11 月 30 日）



図 4. 現在のビオトープ（平成 27 年 10 月）

的高密度で確認され、水生昆虫のビオトープとして機能していると評価される。

また、水生昆虫類のエサとなるカエル類は、昨年から誘致されているヌマガエルやツチガエル、トノサマガエル、アマガエルが今年も確認でき、新たにアズマヒキガエルも見つかった。

表1. ビオトープ内で確認された水生昆虫類・両生類

ビオトープ内の生物調査						新たに見つかった種
綱	目	科	種	2014年	2015年	備考
昆虫	カメムシ	アメンボ	アメンボ	○		
		カタビロアメンボ	カタビロアメンボ科の一種	○		
		コオイムシ	コオイムシ	○	○	国・準絶滅危惧、県・部注目種
		タイコウチ	タイコウチ		○	
		ミズカマキリ	ミズカマキリ	○	○	
	コウチュウ	マツモムシ	マツモムシ	○	○	
		ケンゴロウ	コシマゲンゴロウ	○	○	
			チビゲンゴロウ	○		
		ガムシ	キイロヒラタガムシ	○		
			シジミガムシ属の一種	○		
両生	カエル	ヒメガムシ	ヒメガムシ	○	○	
		ヒラタドロムシ	マルヒラタドロムシ属の一種	○		
		アカガエル	トノサマガエル	○	○	
		ツチガエル	ツチガエル	○	○	
		ヌマガエル	ヌマガエル	○	○	
		アズマヒキガエル	アズマヒキガエル		○	
		アマガエル	アマガエル	○	○	
		イモリ	イモリ	アカハイモリ	○	

池沼の環境は安定しているため、餌となるメダカの大きな群れやカエル類の定着が見られた。今後、ビオトープにタガメなどの水生生物がさらに多数誘致されることが期待できる。今後は学校や地元の愛好家で水生昆虫の繁殖や初期発生を担ってもらい、ビオトープ内へ放流する方法の確立を図りたいと計画している。

② 水生植物

26年度9月に植栽したオモダカやフトイなどの水生植物は、ビオトープに根付いており株数も増えていた。これらはタガメの産卵基質となると期待しているものである。1年目のビオトープで大発生していた水田雑草のコナギやアオミドロは、選択的除草によって減少していたが、外来雑草であるエチゴスズメノヒエが増え水面を覆っていた。そのため今回行ったエコアップ作業ではスズメノヒエの除草作業に相当の努力をかけた。過剰に繁茂した水生植物を除去することによって解放水面を確保することができ、トンボ類などが産卵場所として利用すると期待される。

2. 小中学生に対する環境教育

平成26年は7月、9月に小中学生への環境教育を行った。引佐地区にどんな水生昆虫が生息しているのか知ってもらうため、パワーポイントや標本を用いて、子どもたちと会話をしながら水生昆虫の説明を行った。9月に訪問した際には、実際にタガメがエサを捕食する様子を観察してもらった。子ども達は初めて見る水生昆虫に目を輝かせていた。



図5. 植栽したオモダカ



図6. 標本を用いての水生昆虫の説明

27年の9月には、実際にビオトープに行き、中学生と共に活動した。ビオトープ内の生物モニタリング調査や、水生昆虫類の餌となるカエル類がどうしたらビオトープに増殖するのかについて小グループに分かれワークショップを行った。その後、タガメ類のエサとなるカエル類の定着のための冬眠場所作りや生息環境の整備などを実施した。今回は、堆肥置き場の造成や流木や石を積み上げ、平地を耕して畝を作った。

ビオトープ内の生き物調査やワークショップなどを行ったことにより、中学生と親しく打ち解ける

ことができ、会話もはずみ熱心なやり取りができた。引佐北部小中学校から今回の活動についての感想

が届き、「水辺の生き物に初めて触れるができるようになって、とても楽しかったです」、「生き物

たちはふるさとの宝物だ。それを守る活動はとても大切だということを学びました。」「この生き物達を守っていくためには、もっと地域全体で取り組んでいく事が大切だと思いました。」「このビオトープを自分達の手で守っていきたいし、たくさんの生き物がいたこのビオトープを誇りに思います。」など今回の作業を通して水生昆虫保全へ強い関心持つてもらうことができた。

3. 生息環境調査と保全活動

(1) 浜松市引佐地区における水生昆虫相調査

環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されているタガメを中心とした水生昆虫類の分布調査を、県内では最も水生昆虫類の記録が多い浜松市引佐地区において行ってきた。

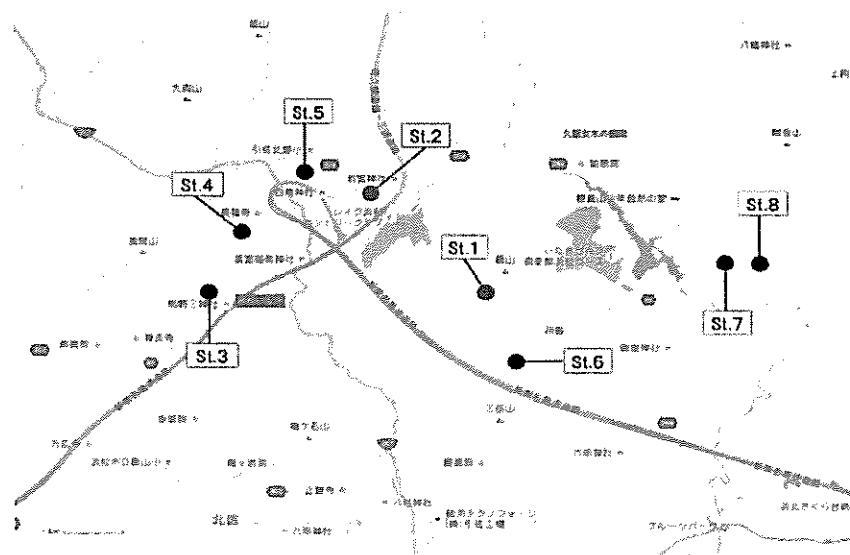


図 10. 2015 年度の調査地点



図 7. 実物の水生昆虫を用いての説明



図 8. ビオトープで確認された水生昆虫の説明



図 9. 完成したエコスタック

今年度の調査では、以前から本ゼミによる調査が行われてきた 2 地点 (St.1 と St.2) の他、専門家へのヒアリングや地形図の読み取りから抽出された、6 つの調査地点を加えて捕獲調査を行った。

調査結果を、タガメ類や水生甲虫類に限って集計した結果、8 科 16 種が確認された。St. 1 では今回の調査でもタガメが捕獲された

が、それ以外の地点ではタガメは確認されなかつた。このことから、St. 1 に生息するタガメの個体群は引佐地区のタガメのメタ個体群が再生産・供給されるソース個体群であると考えられる。しかしながら、St. 1 でのタガメの捕獲数が 2014 年度は約 20 匹であったのに対し、2015 年度は 5 匹と減少したことから、同地区的タガメ個体群はごく小規模なものであり、捕獲数が減少したことから生息数も減少していると考えられるため、同地区的タガメ個体群は絶滅の危険にあると考えられる。

St. 1 における生息数減少の原因を解明し、生息数の回復・増加を図るために取組が必要であると考えられる。St. 2, 7, 8 ではタガメの産卵基質となる抽水植物のまとまとった群落が、St. 2～St. 8 の全ての地点で、種数に差はあるものの、タガメの餌資源として利用されやすいカエル類の成体や幼生が確認され、今後、新たなタガメの生息地となることが期待される。St. 2～St. 8 の環境は小規模であるが、ソース個体群を中心とした絶滅の危険性を分散・軽減する機能を持つシンク個体群を形成することが期待される。

(2)ため池におけるタガメ保全

①タガメの生態

タガメは、体長 55～60mm の水生昆虫で、日本最大の大きさである。鋭い爪のある前脚を器用に使い獲物を捕らえる。エサを食べる時は、口吻を獲物に突き刺し、消化液を出して溶けた体液を吸汁する。餌は、オタマジャクシ、フナなどの淡水魚の他、ヒバカリ(蛇)なども捕食する。産卵時期が特徴的で、メスが産卵をするとオスが卵塊に覆いかぶさり外敵や乾燥から守る保育行動を行う。オスが保育せずに放棄すると、自然界では孵化できないことが保護上重要なことである。

②タガメの生息池の状況

浜松市引佐地区の標高 450m 程の丘陵地に、13a 程の小さなため池が発見された。26 年度から引佐地区でタガメの生息地を探したが、静岡県の中ではこのため池しかまだ見つかっていない。狭い谷口にある堤体で湧水を溜めた形態で、水生植物ではジンサンイやフトヒルムシロ、フトイが見られた。池の周辺は広葉樹林が鬱閉し、岸近くの水面を被覆している。26 年度の調査で水生カメムシ類 8 種や水生甲虫類 6 種を確認

表 2. 2013 年度から引佐地区の調査で捕獲された水生昆虫

過去3年の調査で確認された種(タガメ・水生甲虫類)	
コオイムシ科	タガメ
	コオイムシ
	ミズカマキリ
タイコウチ科	ヒメミズカマキリ
	タイコウチ
マツモムシ科	マツモムシ
ミズムシ科	ミズムシ亞科の一種
アメンボ科	オオアメンボ
カタビロアメンボ科	カタビロアメンボの一種
	ヒメゲンゴロウ
ゲンゴロウ科	チャイロマメゲンゴロウ
	クロズマメゲンゴロウ
	コシマゲンゴロウ
	チビゲンゴロウ
ガムシ科	ヒメガムシ
	シジミガムシ属の一種
計 8 科 16 種	

表 3. 2015 年度の調査で St. 2 から St. 8 で捕獲されたカエル類

		St.2	St.3	St.4	St.5	St.6	St.7	St.8
アカガエル科	ツチガエル トノサマガエル		○		○		○	○
スマガエル科	スマガエル	○			○			
アマガエル科	アマガエル				○			
ヒキガエル科	アズマヒキガエル 幼生(種不明)	○		○			○	



図 11. タガメが卵塊を保護している



図 12. タガメが生息しやすいため池

することができ、水生昆虫の主要なエサとなるオタマジャクシが豊富で、汚水や農薬の流入がないため水生昆虫類が生息しやすい環境である。

一昨年から調査した結果、平成 26 年 6 月 14・15 日にフトイに産み付けられた卵塊は 21 卵塊であったがそのうちの 1 卵塊しか保育されていなかった。放棄された 6 卵塊を大学等で人工保育を試みたが、1 匹も孵化しなかった。平成 27 年 6 月 24 日には見つかった 9 卵塊中、4 卵塊でだけオスの保育が確認された。

③ 生息地保全の取り組み

調査からタガメの卵塊数の減少傾向と、オス親の保育行動の放棄により孵化に至らない卵塊が多いことが分かり、その原因を検討した。一番の原因是、この池に和食の高級素材となるジュンサイが多く自生していることに関係がある。ジュンサイを収穫する人たちの使うボートが、フトイ群落に当たる度に、保育中のオスが驚いて卵塊を放棄してしまう様子を観察することができた。二番目には無断放流された錦鯉（全長 40 cm）がタガメの幼虫を食べてしまうことが考えられる。また、タガメの密漁や、フナ釣りの影響も原因の可能性がある。その中では、ジュンサイ採りによる繁殖環境の搅乱が最も大きいと考えられた。ボートが卵塊放棄の原因となる実態を目の当たりにした後、ため池を管理している浜松市の農政課を通して、ジュンサイ採りのグループ（浜松市内）に折衝を試みた。保護の協力を求めたところ、快諾していただいたが、市の許可を得ずに採取している人が存在していることも判明した。

そこで、27 年 10 月に 3m の物干し竿・園芸用ポール・ネット等を使い、ボートによる保育放棄を防ぐための防護柵（長さ 28.5 m、幅 90 cm）を設置した。今後の産卵・繁殖状況を詳細に記録し効果を検証する計画である。錦鯉の除去や看板の設置等も浜松市と相談しながら実施を検討している。

(3) 久留女木棚田の生態系復元（エコアップ）の検討

引佐地区全体を概観し、水生昆虫にとって好適な生息地が多く存在する地域を探す過程で、久留女木の棚田が注目された。久留女木の棚田は平成 11 年に静岡県の棚田十選にも選ばれ、現在も美しい自然景観を持っている。総面積は 7.7 ha と広大であるが、作付されている面積は平成 27 年現在、52%、約 4ha であるという。これだけのまとまった大きさの水辺が存在していることから、今なお、たくさんの水生生物を抱える可能性があ



図 13. 卵塊の保護柵を作っている様子



図 14. 完成した保護柵



図 15. 久留女木棚田の全景

ると考え、現地調査を行った。

しかし、農業者の高齢化や後継者不足などで放棄水田などが増え、乾燥化した地域が広くあり、作付されている地域も生物が乏しかった。過去に分布していたタガメの他、タイコウチやゲンジボタルなどの水生昆虫類は現地調査で確認できなかった。また、トノサマガエルなどのカエル類は減少の一途を辿っているようだ。そこで、松崎町の棚田の自然復元に関わってきた経験などを元にして、久留女木の棚田の現状を分析し、希少な水生生物の生息地とするためのエコアップ方策を検討した。

久留女木棚田は大きな水源林を持ち、湧水量が豊富であるが、稻の成長期に水温が低いため、田んぼ内に「江」や「ひよせ」と言われる水路を掘り、水を回して温め、さらに田越灌漑による導水方法を取るなど工夫が見られる。また、温水池として機能すると考えられるため池跡を7つ確認できたが、土砂で埋まっており機能していないかった。これらのことから、久留女木棚田は、特に多様な水生生物の生息環境になりうる可能性が十分にあると判断し、生物多様性の高い環境に復元する方法として、「ふゆみず田んぼ（冬期湛水田）」、「ため池の再生」、「カエルの現存量を増やす対策」の3つの提案を考えた。

1つ目の「ふゆみず田んぼ（冬期湛水田）」は、稻刈りが終わった水田に晚秋から早春まで水を張ることをいい、棚田地域内にある湧水や水抜きパイプ等から得られる水を、休耕田に導水し、乾田化する季節に水を湛えた水田をブロック毎に確保するというものである。トンボ類の利用

や、特にカエルやタガメなどの水生生物が稻刈りで乾燥した田んぼから避難する場所として活用する狙いである。

2つ目の「ため池の再生」は、7つ確認された広さ0~30m²のため池跡を40~50cm掘削し、山からの湧水を溜めることで、一年中安定した水辺を確保する提案である。久留女木の場合、水源林が深いため、湧水の水量は安定して十分あり、冬季に水が枯れたり凍ったりする心配がないのが魅力である。コンクリート製の水門も残っており、水深を確保し、水際などの生息環境（ナーサリースペース）を整えれば、タガメなどの水生昆虫にとって魅力的な場となると思われる。

3つ目の「カエルの現存量を増やす対策」では、稻の成長期に田んぼに留まって有機的な農業に貢献する絶滅危惧種のトノサマガエルやナゴヤダルマガエルを増やすと同時に、これらのオタマジャクシが、タガメなどの水生昆虫の重要な餌資源となるという効果が期待できる。これらのカエルの現存量を

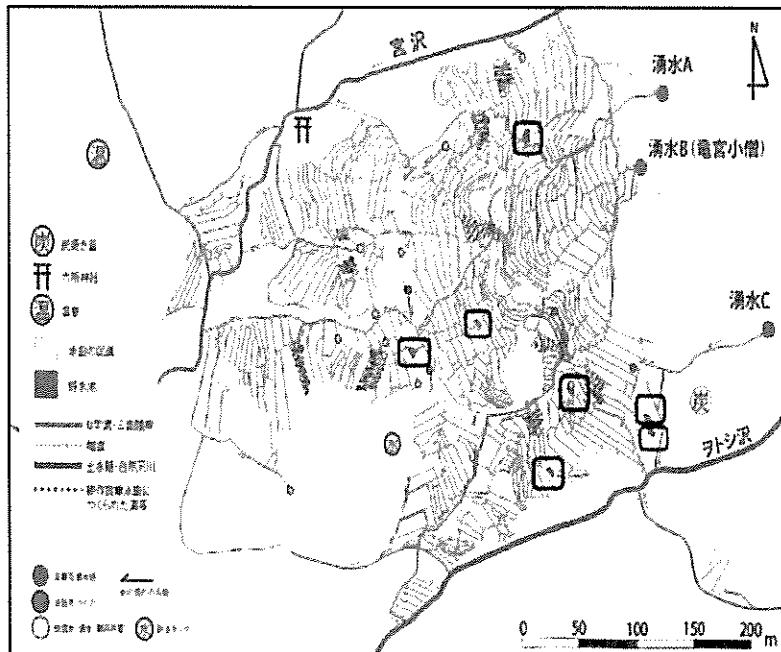


図 16. 久留女木棚田の水路網（2012年作成の図を加工）

注) 太黒枠がため池、赤色に塗った場所がふゆみず田んぼにしたい休耕田

増やすために、復田を進めることや、秋以降の生息場（冬水田んぼ、ため池）を確保する他に、冬眠する場所の確保が必要である。そのために、休耕田を畑として耕し、潜り込める柔らかい敵を形成することと、落ち葉プールや堆肥置場をつくることなどが有効な手段として考えられる。

4. タガメの域外保全

分布調査の結果から、タガメの生息域外保全を行う必要があると考え、2014年度の浜松市引佐地区での調査で捕獲されたオス4個体、メス3個体を大学に持ち帰り、実験室内で飼育・ペアリングした。3ペアのうちの2ペアから得られた2卵塊を人工孵化させて、幼虫計147匹を飼育した。



図 17. 一齊に孵化する一令幼虫

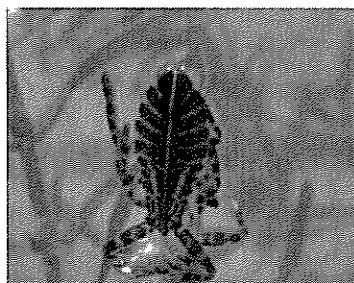


図 18. 共食いをする一令幼虫



図 19. 脱皮不全で死亡した二令幼虫

147個の卵を100%の孵化させることができたものの、餌の食べ残しによる水質悪化や多頭飼育による共食い、脱皮不全等の原因で、成虫個体を得ることはできなかった。今回の飼育での幼虫の死亡率は一令の段階で最も高く、主に水質悪化や共食いによると考えられる。また、自然の下では一回の繁殖期に2~4の卵塊を産むとされるが、一つずつの卵塊しか得られなかつた。これを解決するためには、餌を充分に与えて成虫の産卵回数を増やすことや、幼虫の個別飼育による共食い防止、こまめな水換えによる水質悪化防止などが有効だと考える。オス不在の人工孵化でも、加湿の工夫により100%の孵化率を達成できた。産卵数を増加させ、幼虫の飼育環境を改善すれば、多くの生存個体を得ることが可能である。また、飼育下で成虫まで成長させるのではなく、生存率が高く、より外敵から捕食されにくい2令~3令の幼虫をビオトープなどの自然の環境下に放逐し、そこで成虫まで成長させる手法が、個体群維持に有効だと考えられる。

浜松市天竜区水窪町における民間口承文化財(昔話)の採録調査

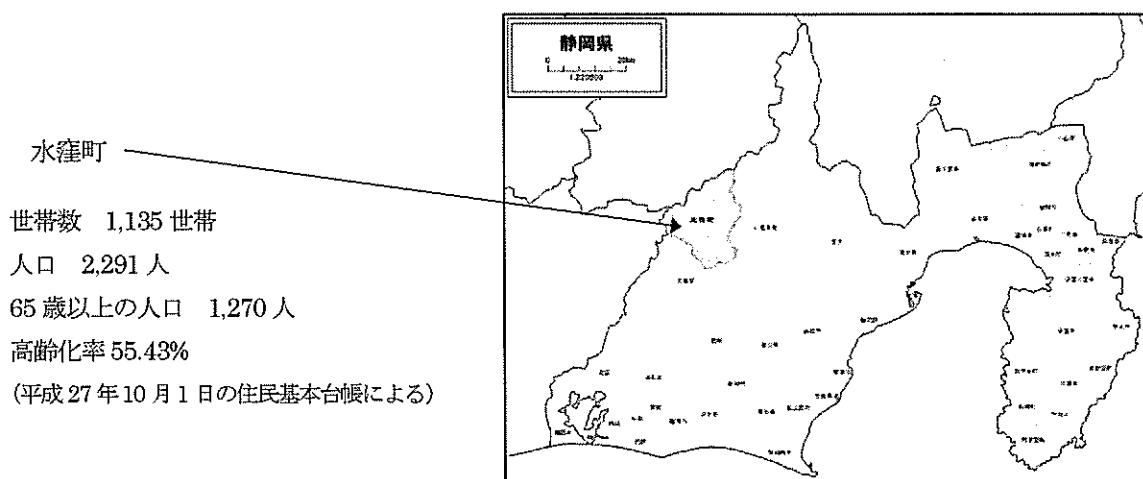
静岡文化芸術大学 文化政策学部 二本松康宏ゼミ

指導教員：准教授 二本松康宏

参加学生：岩堀奈央、植木朝香、末久千晶、鷹野智永、久田みづき

1. 要 約

浜松市天竜区水窪町における民間口承文化財(昔話)の記録、保護・保存、継承、公開、普及を目的とする。浜松市水窪協働センター、町内自治会と連携し、地域の人々が伝えてきた昔話を採録する。採録した語りは「方言のまま」「語り口調のまま」に翻字・記録する。資料的価値や学術的価値、記録的価値を精査したうえで掲載できるものを精選し、それに伝承地域の解説を書き添えて、書籍として刊行する。



【水窪町の沿革】

明治 22 年(1889)	奥領家村、地頭方村、山庄村、相月村が合併して静岡県周智郡奥山村となる
大正 14 年(1925)	町制施行によって水窪町と改められる
昭和 26 年(1951)	周智郡から磐田郡に編入
平成 17 年(2005)	浜北市、天竜市、引佐郡細江町、三ヶ日町、引佐町、浜名郡雄踏町、舞阪町、周智郡春野町、磐田郡佐久間町、龍山村の二市七町一村とともに浜松市へ編入
平成 19 年(2007)	浜松市は政令指定都市に移行し、水窪町は天竜区水窪町となる

2. 研究の目的

《昔話研究の現状》

日本各地の山間地域では極端な高齢化と過疎化が進み、かつてのように昔話を語り伝える人々は急激に減少している。1970 年代後半から 1990 年代前半にかけては現在の日本昔話学会の前身となった昔話研究懇話会を拠点として、國學院大学(野村純一)や東洋大学(大島建彦)、関西では立命館大学(福田晃)、関西外国語大学(三原幸久)、京都女子大学(稻田浩二)、大谷女子大学(岩瀬博)などにおいてゼミや研究会による組織的かつ本格的な昔話の採録調査が展開され、調査報告書の公刊が相次いだ。しかし 2000 年頃から、こうした調査がきわめて困難になったといわれる。それには以下ののような事情が考えられる。

・ 「お年寄り」の減少

「高齢者」は増えたが、戦後の高度経済成長を支えて働いてきた人たちは昔ながらの昔話を語るような「おじいちゃん」「おばあちゃん」ではなくなった。

- ・ 少子化の影響

山間地域では極端な少子化が進み、孫と同居する高齢者が減ったため、高齢者は自分が幼少の頃に聴いた昔話を自分の孫に語る機会がなくなった。現役の語り手ではなくなつた。

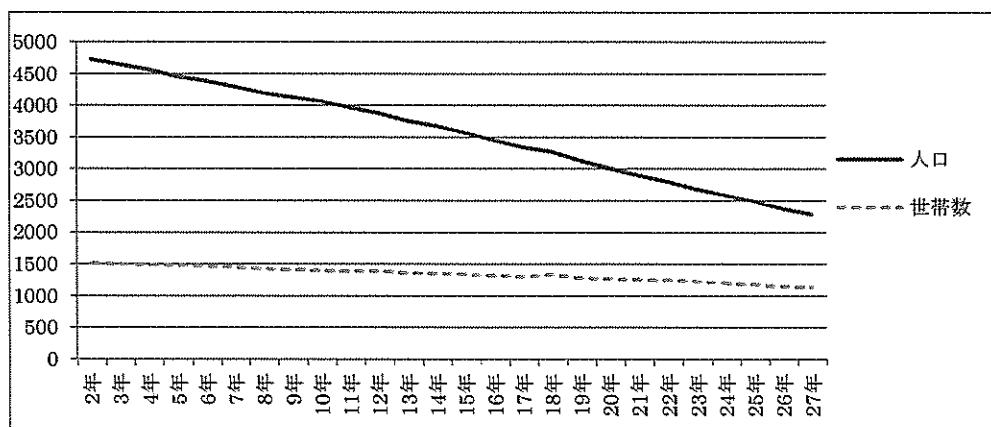
- ・ 学生の志向の変化

1990 年代後半頃から学生がボランティアや社会貢献、地域貢献といった直接的な手応えを実感できる活動を志向するようになり、自分たちの“成果”につながりにくい昔話の採録調査を忌避する傾向が見え始めた。(70 年代から 90 年代前半までの調査では、採録に 3 年～5 年を費やし、報告書の公刊までにはさらに数年を要することが多かった。つまり報告書の公刊は大半の学生にとっては卒業後のこととなる)

《水窪における昔話の伝承状況》

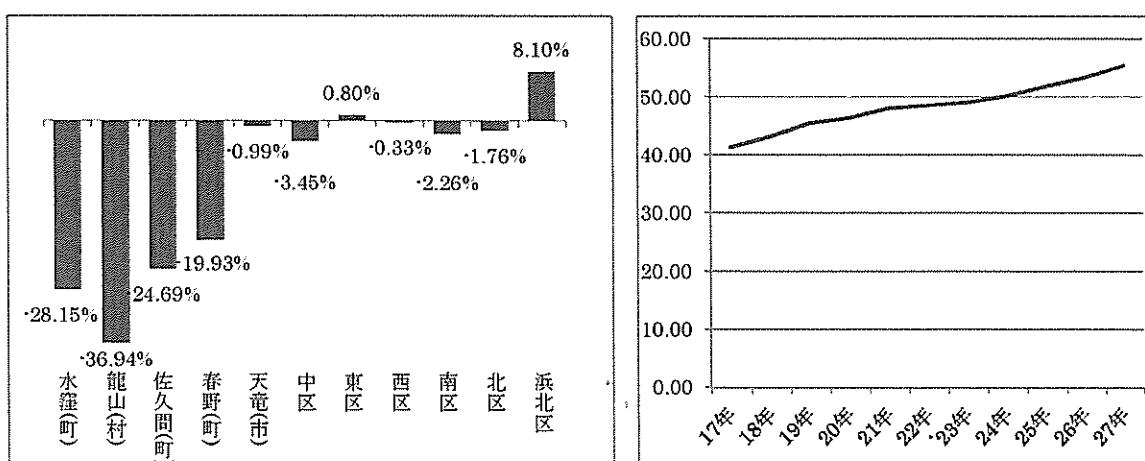
昭和 5 年に折口信夫が「西浦の田楽」を東京に紹介して以来、水窪は民俗の宝庫と謳われてきた。しかし昔話については、これまでに本格的な採録調査はなされていなかつた。そこで私たちは 2014 年度からの 3 ヶ年計画で水窪町における昔話の採録調査を開始した。1 年目の調査では、昔話、伝説、世間話に分類される約 100 話の民間口承文芸が記録された。とくに現代では希少とも言うべき優れた語り手の存在が確認され、また従来の話型目録にはない昔話も新たに見出された。水窪には昔話の語りがからうじて伝承されている。この調査は水窪の地域と家系に根差して語り継がれた口承無形文化財を発掘し、その記録と保存を目的とする。語り手たちの高齢化を慮ると極めて緊急的な課題である。

【参考資料 1】水窪町の人口と世帯数の推移（平成 2 年～平成 27 年）



【参考資料 2・左下】浜松市旧市町村の人口の増減率（平成 19 年・政令指定都市への移行～平成 27 年）

【参考資料 3・右下】水窪町における高齢化率の推移（平成 17 年・浜松市への編入合併～平成 27 年）



3. 研究の内容

- ・ 2014年4月からの3ヶ年計画で水窪町全域での昔話の採録調査を実施する。2015年度は、水窪(本町)、長尾、西浦、竜戸、向市場において調査を実施する。
- ・ 水窪協働センターと連携し、各自治会に協力を要請する。
- ・ 集会所における集団調査と自宅への個別訪問による調査。
- ・ 採録した昔話は学術上の位置付けや記録価値などを精査したうえで、「方言のまま」「語り手の語り口調のまま」に翻字・記録する。
- ・ 伝承の解説を書き添え、書籍として刊行する。口承文化の保護・保存と継承、公開、普及を目的として、刊行に際しても「方言のまま」「語り手の語り口調のまま」を重視する。

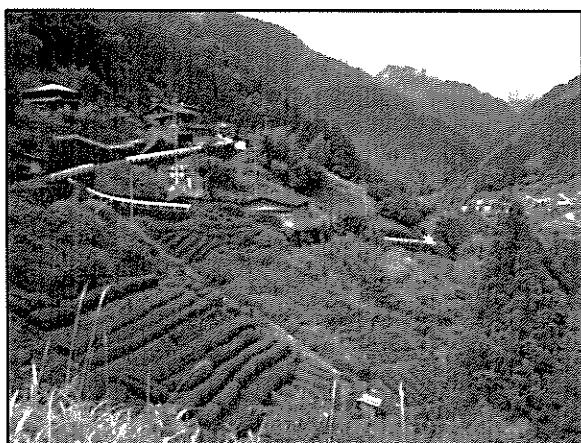
【参考資料4】自治会ごとの世帯数と人口

自治会	世帯数／人口	調査年度		
		2014	2015	2016
水窪(本町)	90／206		○	
神原	270／567			○
小畑	315／616			○
竜戸	49／100		○	
長尾	42／93		○	
西浦	65／145	△	○	
草木	12／19	○		
大野	24／38	○		
門谷	5／8	○		
向市場	94／203		○	
上村	37／68	○		
向島	39／76	○		△
門折	32／43	○		
水窪町全体	1077／2182			

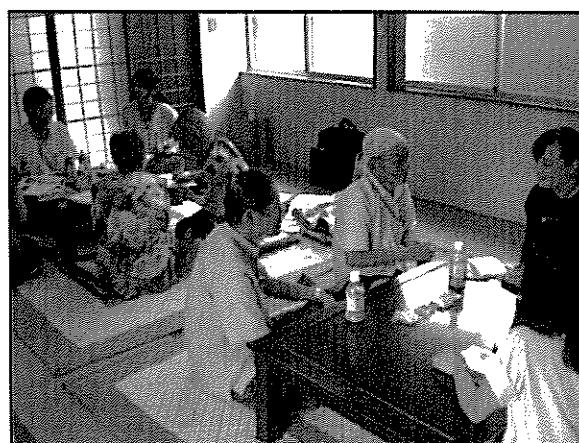
(2015年4月1日現在) 資料提供：水窪協働センター

【採録調査の記録】集…集団調査 個…個別調査

1	5月30日(土) ～31日(日)	集(長尾) 集(竜戸)、個(長尾)
2	6月20日(土) ～21日(日)	集(西浦) 集(向市場)、個(竜戸、向市場)
3	7月18日(土) ～19日(日)	個(長尾、西浦、向市場) 集(本町)
4	8月1日(土) ～2日(日)	個(西浦) 個(本町)
5	9月13日(日)	個(本町、長尾、竜戸、向市場)
6	9月30日(水)	個(本町、西浦、向市場)
7	10月11日(日)	個(本町、長尾、西浦、竜戸、向市場)
8	11月14日(土)	個(長尾、西浦、竜戸、向市場)
9	11月21日(土)	個(本町)
10	11月29日(日)	個(本町)
11	11月30日(月)	個(向市場)
12	12月19日(土)	個(本町、西浦、向市場)
13	1月15日(金)	個(長尾、竜戸、向市場)



竜戸の風景（2015年6月21日）



水窪公民館(本町)での採録（2015年7月19日）

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

水窪(本町)、竜戸、長尾、西浦、向市場の5地区において集会所での集団調査および個別訪問による採録調査を実施。採録した昔話は学術上の位置付けや記録価値などを精査したうえで、「方言のまま」「語り口調のまま」に翻字・記録する。伝承の解説を書き添え、書籍として刊行する。

(2) 実際の内容とその理由

A(予定どおり) 2016年1月27日現在、地区ごとの伝承の解説を執筆中

(3) 実績・成果と課題

『みさくぼの民話』(二本松康宏監修、岩堀奈央・植木朝香・末久千晶・鷹野智永・久田みづき編著、三弥井書店、2016年3月、定価1,000円(税別))を刊行予定。

(4) 今後の改善点や対策

集会所での集団調査では男性の参加が多く、女性の参加が少なくなる。昔話は男性よりも女性(母系・おばあちゃん)から伝播・伝承される傾向が指摘されており、採録でもできるだけ女性の語り手と出会うことが望ましい。個別訪問と地域内での情報収集をより強化する必要があるだろう。

5. 地域への提言

昔話は地域と家庭に伝えられた心の文化遺産である。しかしながら水窪における民間口承文化財(昔話)は話者たちの高齢化と急速な過疎化に伴って、いまや風前の灯火ともいべき状況にある。いっぽうで、2014年の採録調査では昔話約20話を古い方言のままに語る非常に優れた話者も見出されている。

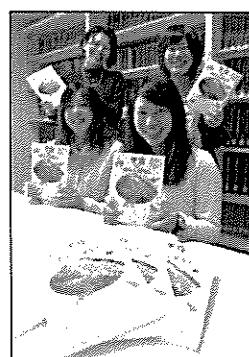
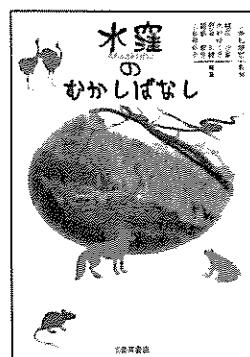
そこで、調査によって見出された優れた語り手については、たとえば小学校や中学校において児童・生徒たちに昔話を語るような機会を設けてはどうだろうか。生きた方言とともに地域の口承文化財が継承されることも期待できるだろう。それは世代を超えた地域文化の継承のためのコミュニケーション・ツールにもなり得る。あるいは語り手が大勢の人前で話すことを好まないならば、少なくともその語りの様子を映像資料に収めておく(アーカイブ化)ことも必要であろう。

可視的な成果を期待して取り組む「地域の活性化」とは一線を画したうえで、地域に伝承された口承文化財の保護と記録、そして継承、公開、普及について考えるときではないか。

※ 近年では「語り部」を称して小中学校や公立図書館などで昔話を語り聞かせる活動も広まっているが、そうした活動では子どもにもわかりやすく標準語化され、再創作された話が大半を占めている。昔話を地域と家庭に伝えられた心の文化遺産と考えるならば、そのような創作を地域の昔話と称して子どもたちに語り聞かせることは、文化の保護・保存と継承の観点から再検討されるべきかと思われる。

6. 地域からの評価

昔話を聴きに訪ねてきた学生たちを水窪のお年寄りたちはとても暖かく歓迎してくださる。何日も前から私たちが来るのを待っていてくださる方、私たちの取り組みが新聞などに掲載されるたびに記事を切り抜いて保管してくださる方、前刊『水窪のむかしばなし』を購入された方も多い。結果としては、地域アイデンティティが再認識されることにより、地域に生きる人たちの生活幸福感に寄与することにもなっている。「待ってたよ」「また来てね」というお年寄りたちの言葉こそが、私たちの調査への何よりの評価であると思う。



[左] 前刊『水窪のむかしばなし』(二本松康宏監修、植田沙来・内村ゆうき・野津彩絵・福島愛生・山本理沙子編著、三弥井書店、2015年3月、A5版、150頁、定価1,000円(税別))

成果報告書「ILoveしづおか協議会と連携した静岡市街地地域活性化プロジェクト」

責任教員：須藤智（静岡大学）・日比優子（静岡英和学院大学）

1. 本取組の目的

近年、高等教育において地域の人材育成のニーズや、学生が将来の社会をイメージした学びを取り込んだ授業科目の開発が求められている。このような高等教育の状況の中で、静岡大学と静岡英和学院大学は、学部2～3年生向けに地域産業界と連携し、地域のニーズを学生に体感させ、大学での学びをさらに充実させるプロジェクトベースドラーニング（PBL）を取り入れたゼミ科目（「地域連携プロジェクト型セミナー」）を実施する。本年度は、最終的に、その科目的スキームをまとめ、しづおかインターナンシップ協議会を通して静岡市街地近郊の大学に周知し、他大学も参加可能な仕組みを構築する。

2. 具体的な内容

一般的なPBLの授業では、学生が挑戦に値すると考えたテーマ・課題に対して、計画、問題解決、調査といった活動を自律的に実施し、それらの活動の成果を制作物やプレゼンテーションの形でアウトプットする（Thomas, 2000）。このような授業は学生の自律性の向上に役立つが、学生のみで行われることで時間を長くかけた割には質の高い内容の成果物を出すことは難しいと考えられる。

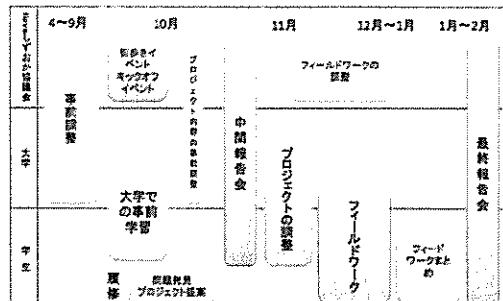
学生の高いアクティビティや質の高い成果物のアウトプットに繋がるアイディアとして、①学生のプロジェクトをより現実的なテーマにする、②そのプロジェクトに大学以外の人々を関わらせるという方法が考えられる。より現実性が高いテーマとして地域課題が考えられる。地域課題は、大学での学問領域での課題と比較すると、より身近で、現実的なテーマであり学生の興味関心を引き出す可能性がある。加えて、地域課題は、それを媒介として地域の人々と学生の関係性を生み出し、大学では体験できない状況や、外部の人の存在は学生にとって「評価される」という状況を生み出す。このような状況は、学生の能動的、主体的な活動を引き出す可能性が考えられる。以上から、PBL授業における地域課題をテーマにプロジェクトを実施することは、学生の「学び」の質を全体的に高くする可能性が考えられる。

そこで本地域連携プロジェクト型セミナーでは、ILoveしづおか協議会（以下、協議会）との連携の中で「静岡市街地における活性化に関する問題」と「静岡県の高齢化問題」を協議会関係者と共に考え、見いだされた課題を解決する方策を学生とともに提案するプロジェクトを実施した。プロジェクトの成果は、協議会へフィードバックし、学生の視点からの地域活性化を促すアイディアとして活用可能かどうかを検討した。本セミナーでは、定期的に大人、大学教員だけでなく学生が

普段接することの少ない地域の社会人、との交流の機会を設けることで、短期間で質の高い成果を出すことおよびそれらを地域に還元することを目指した。

3. 取組の報告

4月から9月にかけて、教員がPBL授業に関して協議会との事前調整を行った。その後、授業は10月から実施した。具体的な実施スケジュールは図1に示した。



3. 1. キックオフミーティングの開催

10月13日（火）にMIRAIERIANにて協議会主催のキックオフミーティングを実施した（学生：21名、学外関係者10名程度）。ミーティングでは、地域活性化に関わる問題に学生が触れる機会として、協議会関係者からの地域課題についての講演を頂き、その後、商店街関係者から街を紹介して頂く「街歩き」を実施した（写真1・2）。

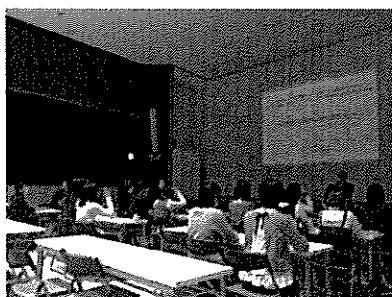


写真1・2 (左) 講演会の様子、(右) 街歩きの様子

3. 2. 中間報告会まで

キックオフイベントの後の1.5ヶ月で、講演会、街歩きによって得られた情報を元に、学生と教員がプロジェクトを立案した。その際に、プロジェクトが実施可能かについて、協議会担当者と調整を行った。学生は、11月の中間報告会に向けて、プロジェクトについての企画プレゼン資料を作成した。



写真3 中間報告会の様子

3. 3. 中間報告会の開催

11月19日（木）に中間報告会を静岡英和学院大学にて行った。この中間報告会では、各プロジェクトの企画案のプレゼンテーション後、協議会の担当者の方々のコメントを頂いた。頂いたコメン

トは各プロジェクトの企画、実施に反映することとした。立案プロジェクトは表1の通りであった。

表1. 平成27年度地域連携プロジェクト型セミナーのプロジェクト一覧

大学名	研究室名	プロジェクト名
静岡大学	須藤研究室	大学生視点で製作する新大学生向けおまちガイドブック
静岡英和学院大学	古郡研究室	静岡駅を拠点とした旅行プランの提案
静岡英和学院大学	永山研究室	外国人旅行者に魅力的なインバウンド観光用SNS情報の作成
静岡英和学院大学	日比研究室	おまち愛着に関連する要因と愛着醸成促進プログラムの提案

※詳細は <http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/career/>をご覧ください。

3. 4. プロジェクトの実施、最終報告会

中間報告会の後、研究室ごとに、プロジェクトを実施した。ここでは、静岡大学の須藤研究室と日比研究室のプロジェクト実施について紹介する。須藤研究室では、静岡市外から来る新入生が多いこと、そのため、入学時には静岡市街地のことをよく知らない学生が多いという現状を踏まえ、静岡市の市街地について知識の無い学生に市街地「おまち」を紹介し、市街地を学生の橋渡しができるツールを作るプロジェクトを実施することとした。SNS等で情報発信する方法も考えられたが、今回は、学生が製作するということで実際に「見てもらえる」ツールとして、冊子のガイドブック(図2)を製作、そして、そのガイドブックを配布する方法、イベント等を企画することとした。

静岡英和学院大学の日比研究室では、静岡市街地（以下、おまち）への愛着に関連する要因を明らかにすることを目的とし、静岡市内の高齢者および大学生を対象に、地域愛着尺度を用いた質問紙調査とインタビュー調査を実施した。質問紙調査では対象者のおまち愛着得点を測定した。インタビューでは、個人関連要因（性別、年齢、喫煙習慣など）、生活関連要因（おまちを訪れる頻度、地域団体活動への参加度など）、地域関連要因（居住年数、住み心地など）について、対象者の実態を詳細に調査した。どのような要因がおまち愛着の高低に影響するのかに関して得られた結果をもとに、おまちへの愛着醸成を促進するプログラムの提案をすることとした。

最終報告会は、2月18日（木）に静岡市街地で実施予定である（この報告書の執筆は1月末）。最終報告会では、各プロジェクトの成果について学生が報告し、協議会へフィードバックする予定である。また、プロジェクトの成果については、大学毎にWebサイト等で情報公開を行う予定である。

3. 5. 学生に対する授業アンケート調査の実施

2月18日の最終報告会前後で学生に対する授業アンケート調査を実施予定である。調査は、（1）

授業満足度、(2) 授業で新たに学ぶことができたスキル・知識、(3) 授業改善の要望、(4) 社会人基礎力について調査予定である。特に(4)の社会人基礎力についての自己評価については、静岡大学で収集しているデータと比較し、この授業でどのような学びがあったのかを検討する。

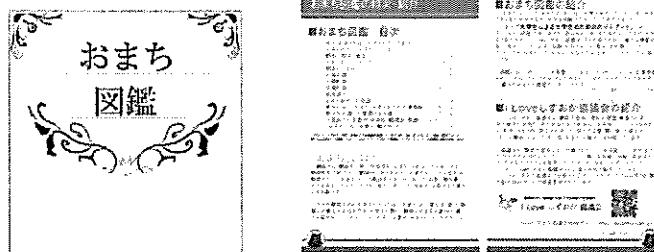


図2 おまち図鑑の概要 (<http://goo.gl/SzUbrm>)

4. 本授業のスキーム展開

本年度は、本授業の枠組みをまとめ、静岡市街地近郊の大学に周知し、他大学も参加可能な仕組みを構築することを目標とした。授業の枠組みや協議会との連携については、本年度までに他大学への展開可能なレベルまで引き上げることができた。静岡大学内においては、本取り組みに関する情報提供のワークショップ等を開催(3月)し、本授業科目のスキームのさらなるプラッシュアップ、展開を図る予定である。学外においては、静岡大学が中心となってはじまったCOC+事業の中での展開についても検討している(1月末現在)。

5. 評価・まとめ・今後について

本プロジェクトはおおむね予定通りに進んだ、自己評価としてはA評価(予定通り)とする。本取組のような地域の産業界の社会人と学生が共にプロジェクトで協働する授業は、学生の学びを促進するだけでなく、地域と大学を橋渡しする役割を果たす可能性がある。このような科目は、大学という閉じた環境の中だけでは体験できない事を学生に提供する。様々な体験を通して、学生は、現実的なスキルが成長できる可能性があるだけでなく、大学では見えない現実的な社会を実感できる。高等教育において地域貢献・地域発展の意欲や能力のある人材の育成をするという目標が具体的になりつつある状況を踏まえると、このようなPBL型授業の授業スキームは、地域と大学が一丸となって人材育成を進めるためには有効な手段だと考えられる。

6. 引用文献・謝辞

Thomas, J. W. (2000). A review of research on project-based learning. Autodesk Foundation, San Rafael, CA.

※謝辞：本取組を実施するにあたりI Loveしづおか協議会の皆様、おまちの関係者の方々に多大なご協力を頂きました。この場を借りてお礼申しあげます。

公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム
〒420-0839 静岡市葵区鷹匠 3-6-1
静岡県総合研修所もくせい会館
電話 054-254-1818
E-mail: mail@fujinokuni-consortium.or.jp

公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム

〒420-0839 静岡市葵区鷹匠 3-6-1

静岡県総合研修所もくせい会館

電話 054-254-1818

E-mail: mail@fujinokuni-consortium.or.jp